

《短 信》

「黒川」と「黒河」について

福島 邦道

本誌第百三十集・百三十一集において、「黒川春村」に関して、「黒川」と「黒河」とで、いずれが正しいのか問題になっている。これについて、図書館学教授の永田清一氏の教示と自らしらべ得たことを記したい。ちなみに、永田氏は、すべての黒川文庫について鋭意調査中の学究である。

黒川春村は、国語学史書のたぐいではすべて「黒川」とするが、「黒河」とするものもある。清宮秀堅『古学小伝』(明治一九)は、国語学史の濫觴とも見られる書であるが、「黒河」である。

黒河春村ハ、号ヲ薄斎、通称ヲ次郎左衛門と云、主水ト呼ヘリ、江戸浅草ノ人ナリ、(下 三二オ)
とあり、終りに、

慶応二年(福島云、一八六〇)十二月廿六日、終ニ没ス、年六十九、浅草新堀端ノ永見寺ニ葬ル、(三三オ)

とある。その永見寺の墓石は、右が「黒河氏之墓」であり、左が春村の「黒河主水之墓」である。

春村自筆の国学院大学蔵『丹生祝氏文』ハニハフリウヂフミン(文久元年八月二十一日奥書)も「黒河」となっている。ほかに、翻刻の叢書類に「黒河」とするものも若干あるが、割愛する。

しかし、春村自身、「黒川」もつかっているものであり、自筆に静嘉堂文庫蔵「黒川春村詠艸」とあるからである。翻刻本ではある

が、弟子の高橋広道(笠亭仙果)は『碩鼠漫筆』の序に、
吾師黒川翁のわかゝりしほどは。
と記している。

このように、春村の時代において、「黒川」「黒河」両用されていたのである。

本来の姓「黒河」が、いつから「黒川」に一般につかわれるようになったのかというと、春村の歿後の明治二年(一八六九)に、養子の真頼に太政官から御用御召があった際、誤って「河」を「川」と記し、以来「黒川」が通称となったのである。

実践女子大学図書館には、黒川文庫の物語随筆類が千四百冊近くあり、その蔵書印は、「黒川真頼蔵書」および「黒川真道蔵書」である。

ただし、真道以後、血族上の子孫は、現在も「黒河」を名乗っているのである。

されば、黒川春村は、「黒河」が正しいのではあるが、「黒川」でもよく、その通用は、春村在世時から今日までつづいているのである。

さて、この文字の通用ということは、文字論でいえば、同音で別表記ということになるわけで、ここで同音別表記の姓のことについてすこしく論じておきたい。

不世出のスポーツマンに長島茂雄という人がおり、将来、野球史を執筆する人が、厳密に考えて、「長島」か、「長嶋」かについて、問題にしたとしよう。長島のスポーツ界での活躍は「長島」であり、「長嶋」でなくてよいというのが筆者の考えである。

由来、国語学は一点一画をゆるがせにしない学問としてとあって

いる。しかし、文字の機能を重んずる時、流用ということも考えなくてはならないのである。

思うに、同音別表記の姓の問題は、はしなくも、「書評」から発
生した、まことにトリビヤルなことであった。もし「書評」がより
高度にシビアに論じられていたなら、こんな問題は派生しなかった
にちがいない、学会のため遺憾にたえない。

——実践女子大学教授——